

第5回「教員研修連続ワークショップ」を開催 チーム「フレンドシップ」、企画・運営に参加

大泉町教育委員会と群馬大学教育学部は、8月3日から5日にかけて、大泉町内小中学校の教員ならびに本学学生・大学院生を対象とする「平成16年度教員研修連続ワークショップ」を大泉町文化むらにて開催しました。これは、教員養成学部フレンドシップ事業(実施責任者:教育学部・結城恵助教授)の一環として、平成12年度から継続的に行われているものです。第5回となる今回は、講師に杉渕鉄良先生、高橋俊三先生、川嶋啓子先生、勝部太先生、金澤貴之先生、高橋のり子先生を迎えて、さまざまな角度から多文化化する教育現場に向けてお話しいただきました。



▲学生が製作した案内用パンフレット



▲高橋のり子先生(写真左)による「美しく、のびやかな日本語で話そう」の講義風景

このワークショップを開催するにあたり実行委員会が組織されました。委員会には大泉町教育委員会や町内の7小中学校の研修担当の先生方とともに、本学の教官と学生チーム「フレンドシップ」が企画段階から参加しました。学生たちは打ち合わせやパンフレット製作などの事前準備をはじめ、3日間のワークショップの会場設営、受付、講師の先生の案内などの運営面にも奔走しました。その活躍ぶりは、ワークショップを成功裏に終わらせる大きな原動力となり、大泉町の先生方から暖かい励ましの言葉を頂きました。

次号のオリオンは…

さあ、「まち」へとび出そう! ~私たちの協働の歩み、それぞれのストーリー~

特集記事では前橋まつりでのだんべえ交流の様子、大泉町立図書館でのイベント「おはなししがつながる・おはなしでつながる」の様子、そして群馬大学工学部の群桐祭で同時開催された「テクノドリームツアーア」に参加したときの模様から、地域に根ざす本プロジェクトの活動をお伝えしていきます。お楽しみに!

編集後記

第2号をここまで読んで下さったみなさま、ありがとうございました。ならびに私たちの取材に協力して下さったみなさま、大変お世話になりました。

今号は学生の活躍がよく見える内容となりました。学生が広く活動するにあたり、多くの方々がサポートしていただけることは本当にありがたいことだったんだなと感じました。この、ついで手が大きな輪となり、多くの人のともへ広がっていく様子がみなさまに伝われば幸いです。

次号もみなさまにさまざまな活動の中身、そして舞台裏を伝えていくように全力で取り組んでまいります。ご期待下さい。
(チーム「小鳥遊」:尾久、片山、加藤、栗原、瀬谷、高橋、福田)

発行元:群馬県・群馬大学「多文化共生研究プロジェクト」

編集担当:チーム「小鳥遊」

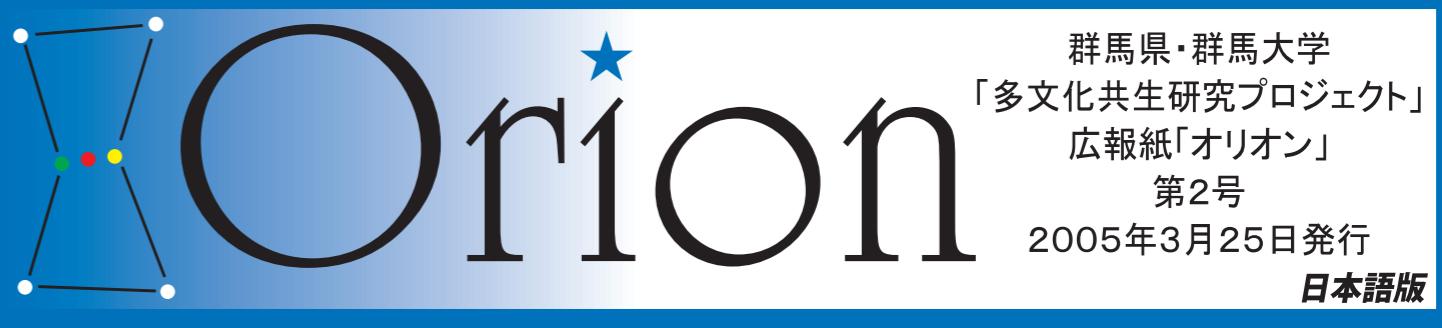
〒371-8510 前橋市荒牧町四丁目2番地

群馬県・群馬大学「多文化共生研究プロジェクト」推進室
(結城研究室内)

Tel/Fax 027-220-7382(ダイヤルイン)
e-mail pcdc@edu.gunma-u.ac.jp

☆多文化共生研究プロジェクトホームページ☆
<http://tabunka.jimu.gunma-u.ac.jp/top.html>

ご意見・ご感想などございましたら、上記までお気軽にご連絡下さい。



群馬県・群馬大学
「多文化共生研究プロジェクト」
広報紙「オリオン」
第2号
2005年3月25日発行

日本語版



協働の輪のなかで育つ学生たち

群馬県・群馬大学「多文化共生研究プロジェクト」
代表 結城 恵
(群馬大学地域連携推進室職員・教育学部助教授)

本プロジェクトは、地域のみなとの協働プロジェクトです。そこには活動を支えるたくさんの学生ボランティアもいます。その数、3年間でのべ458人。平成14年度にプロジェクトが発足した当時の学生スタッフはわずか6人でした。今では、前橋工科大学、東京外国语大学、早稲田大学、上智大学など県内外の大学からの学生さんの参加も見られるようになりました。

第2号となる本広報紙は、そうした学生スタッフの活動の舞台裏に光をあてます。学生が地域のみなと協働で企画・運営した「だんべえフェスタ」「教員研修連続ワークショップ」、地域のみなさんと学生を育てて頂いた「多文化共生インターンシップ」。学生たちが何を感じ、何を学んだのかを描きます。群馬大学では今後とも「共生マインド」を持つ学生を育てていきたいと思います。よろしくご指導下さい。

踊りで交流! 「だんべえ」フェスタに参加



7月10日は、「前橋七夕まつり」の日。特設会場「私のステージ・自慢市」では、前橋で生まれただんべえ踊りを披露。たくさんの地元の同好会の方々が参加し、ステージを盛り上げました。

「だんべえ de サルサ」 で国際交流

だんべえ踊りは、ジャズ、ファンク、サンバのリズムを取り入れられたいわば「多文化共生」踊り。私たちは、そこにサルサを組み込んでみたらと思い、以前より交流のあるイスパーノに相談。学校のある伊勢崎市に学生たちが何度か通って、みんなで「だんべえ de サルサ」を創作・練習しました。

「スタイルもリズムも異なる2つの踊りを融合させ、だんべえの基本を残しながら新しい踊りにしたてていく。そのプロセスに〈共生〉の姿をかいだ見た感じがする」(リーダーの萩原紗矢香さん:教育学部4年)。



◀ 空き時間には宣伝活動。手づくり鳴子がぶら下がる看板に、みんな興味津々(^^)v



チーム「フレンドシップ」は活動の一環として、昨年度より「だんべえ踊り」を県内外の外国人学校に紹介する活動を行っています。「以前にPCDCのイベントでブラジル格闘技カポエイラをブラジル人学校の皆さんに教えてもらいとても楽しかった。その恩返しに、前橋のだんべえ踊りを外国人学校に伝えたいと思った」(川島則浩さん:教育学部大学院1年)。

▲突然のどしゃ降り。ビニールシートでブースを覆ってくれた応援団に感謝です。



私だけの鳴子づくり

空き時間には宣伝活動。手づくり鳴子をぶら下げる看板に、みんな興味津々な様子でした。その成果もあってか「鳴子・Naruko」工作教室は大盛況。慣れない手つきでハサミを使う小さなお子さんもお兄さん・お姉さんのサポートで完成していました。



深夜まで続く準備作業 でも心は弾みます

学生の私たちもそれぞれに忙しい。だから、ちょっとした空き時間にも活動部屋に集まって踊りの練習と工作作業をすすめました。本番前夜にも、鳴子のつくり方シート、呼び込みチラシの制作と作業は続きました。その中には、アルバイト帰りに踊りを点検してもらうスタッフ、会場用ビニールシートに雑巾がけする教育実習帰りのスタッフの姿も。地域のみなとの出会いを楽しみに本番に向けて会話を弾みました。



つないだ手・広がる輪

～多文化共生インターンシップ～

多文化地域である大泉町の教育機関、行政機関で就業体験をする多文化共生インターンシップが昨年8～9月に行われ、群馬大学の学生21人が参加しました。このインターンシップのねらいは多文化地域で共生マインドを持った高度職業人として活躍できる人材を育てることで、全国的に見ても初の試みです。専門性を高めたり、異業種を経験できるという特徴を持つ、普通の就業体験とは一味違うこのインターンシップ。参加した学生は、一体何を感じ、考えるようになったのでしょうか？私たちは、テーマを「つないだ手・広がる輪」とし、このインターンシップを学生の声で紹介したいと思います。



セナが人々をつなげる ～イルトン・セナ展～

イルトン・セナ展でのインターンシップ。私たちは、役場のみなさんの後姿に学び、「セナ展で出会うすべての人たちと心のつながりを持ちたい！」と思いました。例えば尾久章子さん（社会情報学部3年）は、ポルトガル語を暗記して案内に挑戦。ポルトガル版案内カードをつくり駆使しました。その効果は期待以上のものになったようです。「笑顔が返ってきた。コミュニケーションのきっかけづくりのコツを体感した」と目を輝かせていました。



「小さな子どものお客さんには目線を合わせる。お客様の様子をみてさり気なくサポートする。言葉も大切だけど、お客様との言葉を越えたコミュニケーションも大切だと学んだ」と瀬谷智くん（社会情報学部3年）。

言葉が必ずしも通じない、でも、セナへの思いで人々がつながっているという状況の中で、私たちはコミュニケーションのきっかけを考える新鮮な体験を積むことができました。

専門分野へつながる ～異業種体験～

大泉町立西小学校と南小学校でインターンシップを体験した医学部保健学科3年の温井智美さん。子どもたちへの学習支援を通して、子どもの身体・学習の発達段階や文化の違いをイメージできるようになったそうです。また、子どもたちへの対応や退院後の指導のあり方について、先生方の率直な意見をうかがうことができたことも、温井さんにとって大きな収穫でした。今回の経験で学んだことを、臨床実習に活かしたいと抱負を語ってくれました。



一方、根岸孝明くん（工学部3年）は保育園でのインターンシップをするというユニークな体験をしました。子どもたちと存分にふれあう中で、根岸君は専門職業人としての新たな発想を得たようです。

「保育園という空間から子どもや外国人にとって優しい、ユニバーサルデザインの都市計画を考えるようになった」と、後期の講義への意欲も高まっているようでした。

温井さんや根岸くんが語るように、私たちにとって多文化共生インターンシップは、自分たちが学ぶ専門分野を異なる分野から考える機会になりました。

頭と心がつながる ～自然にあった多文化共生～

私たちはこのインターンシップに参加するにあたって、外国籍の人々への対応や言葉の問題など、多くの不安要素を抱えていました。しかし実際の現場で感じたこと、それは言葉や異文化以前に、心の交流によって自然と多文化共生が築かれていたということです。国籍の違いを気にせず一緒に遊び、ときにはケンカもして、ごく自然に触れ合っている光景を、保育園や小学校、児童館などで多く目にしました。これは、私たちの共生マインドを育てる上でとても大切な要素です。「頭の中ではばかり多文化共生を考えていたいいけないということを、子どもたちが教えてくれた気がしました。心と心の交流。それを実体験にしたことが今回のインターンシップでえた大きな収穫です」と児童館で実習を終えた新增友紀さん（教育学部4年）は話してくれました。



▲児童館で実習しているネイラ・ルセロさん（工学部2年）



学生生活へつながる ～学生のそれから～

「セナ展で大泉町の職員の方のお手伝いをさせていただいたことによって、多文化地域の行政にとても魅力を感じるようになった」と、語るのは社会情報学部3年の栗原健児くん。彼はインターンシップの経験から、大泉町の職員を志望するようになり、また、卒業論文も多文化に関する「地域エスニックメディア」を題材に取り上げ、フィールド調査を続けています。

今回の多文化共生インターンシップに参加した学生の多くは、大泉町が実施した「外国人との協働まちづくりアンケート調査」について話し合う学生たち。お昼休みのわずかな時間を利用して話し合い、学生が積極的にボランティア活動に参加しようという様子がうかがえます。



町と大学がつながる ～インターンシップ報告会～

大泉町と群馬大学がこれまでに築き上げてきたパートナーシップ。これがもたらす、この度のインターンシップが成功したのだと思います。報告会に、学生がお世話を担当した機関の関係者や大泉町長、大泉町教育委員会教育長、群馬大学教職員や学生が参加しました。

「共生マインドを持った人材は、これから大泉町だけでなく全国各地にも必要になります。みなさんには、そういった人材になって欲しい」と長谷川町長の言葉から報告会はスタート。



▲大泉町長の長谷川洋さん

「町職員の方、そして学生たちそれぞれの感想を聞いたが、たくさんの意見があつて面白かった。アットホームな雰囲気の中で、楽しく意見のやりとりができる」という意見が多かったようです。少し緊張を見せながらも、学生たちは精一杯意見を述べていました。報告会後の懇親会では、学生がお世話を担当した職員の方だけでなく、つながりを持っていなかった方と会話をし、輪を広げる場面も。大泉町と群馬大学のパートナーシップが一層深まるることを期待しながら、報告会は幕を閉じました。